様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３１４５

研究課題名（和文）民具の活用に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the utilization of folk implements

研究代表者
山川　志典（YAMAKAWA, YUKINORI）

早稲田大学・リサーチイノベーションセンター　オープンイノベーション推進部門・次席研究員（研究院講師）

研究者番号：２０８４７０４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、民具の今後の継承にむけて、民具の活用の可能性を検討する際に基礎となる知見の構築を目指した。そのため、自治体や博物館における実践例や民具研究における見解を対象とし、情報の収集と分析を行った。近年の民具の活用に関する現状からは、一般の人に民具を身近な存在として受け止めてもらうことの重要性がうかがえた。ここから、これまでの民具研究の動向をふまえ、民具の活用の可能性へ結びつく着眼点を検討した。結果、①民具の調査活動が持つ地域社会にとっての意義、②現代・同時代の暮らしと物の研究動向との接点という２点を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、民具の活用をめぐる近年の動向をふまえ、民具の活用の可能性として、２点を指摘した。現在、文化財や博物館の地域資源化が高まっており、民具も活用が期待されている。民具の有する価値について再考した本研究は、今後の民具研究における活用の理論化や、自治体や博物館における民具の活用実践の一助となる意義を有している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to build knowledge that will serve as the basis for examining the possibility of utilizing folk implements in order to inherit them to the future generation. Therefore, I collected and analyzed information on practices by local governments and museums and opinions on folk implements research. Examining the museums' current approach to the utilization of folk implements reveals that there is a tendency to place emphasis on how to make people feel familiar with folk implements. From this point of view, based on the trend of folk implements research so far, I examined points that lead to the possibility of utilizing folk implements. The results are the following two points: (1) significance of folk implements research activities for local communities, and (2) the interface between contemporary life and research trends of things

研究分野：民俗学

キーワード：民具　文化遺産　有形民俗文化財　文化財保護　文化遺産の保存と活用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

人々の生活の中で使われてきた数多くの物（道具）である民具は、日本においては文化財指定や博物館資料化といった動きと密接に関わりながら継承されてきた。現在、様々な文化遺産／文化資源の活用が求められ、民具もその活用が期待されている。その一方で、博物館や収蔵庫の統廃合や大規模災害での被災等を契機として、収蔵されている民具の取捨選択が迫られる事態も起きている。このような状況の中、民具が有する価値について再考し、どのような活用の可能性があるのかを検討することが、民具のこれからの民具の継承に向けて必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究では、民具の活用について、従来の見解や実践例の整理分析を通じて把握し、民具の継承を考えるための基礎となる知見の構築を目的とした。

３．研究の方法

本研究では、「民具研究における民具の活用についての見解」と「文化財としての民具の活用の見解と活用事例」という視点を設けた。

「民具研究における民具の活用についての見解」については、民具研究者の著作や論稿を資料として用いた。また、展示・保存状況の視察や民具研究者・関係者への聞き取り調査により情報を補完した。これらを整理・比較分析し、民具研究における民具の活用がどのようなものであったかについて把握した。

「文化財としての民具の活用の見解と活用事例」については、文化財指定を受けた民具を中心に、自治体や博物館が所有する民具の活用事例に関する報告書や論稿を資料として用いた。また、職員への聞き取り調査により情報を補完した。これより、自治体や博物館が民具をどのように活用しているのかを把握した。

最終的には、２つの視点を整理し、民具のどのような点に着目することが、民具の活用の可能性へ結びつくかについて考察した。

４．研究成果

（１）民具の活用をめぐる近年の動向

民具の保存や活用は、有形民俗文化財や博物館資料として各自治体が担うところが大きい。自治体では、博物館等での展示や使用体験機会提供によって来館者が民具について学ぶ・知る活動を展開してきた。地域の歴史や人の暮らしぶり、生活の変遷を知る資料としての活用は、民具の基礎となる活用である。また、小学生を対象とした地域学習や高齢者向けの回想法に用いる活用は、民具の活用事例として定番になっている。

しかしながら、民具の死蔵（公開がなされないこと）や、十分な検討がなされないままの廃棄・譲渡という状況も生じており、適切な管理や公開については、長らく課題として指摘されてきた。特に近年は財政面から博物館を閉館・休館することや、収蔵施設の老朽化による公開休止や収蔵品の廃棄・譲渡も起きている。このような事態が生じている要因は複数あるものの、先行研究や事例調査からは、民具を収集・調査した時にはわかっていたことが現在はわからなくなってしまったこと、解説や調査ができる学芸員や有識者の不在といった点によって、かつてどういった目的で収集され、どのような使い方をし、どのような価値を有していたのかがわかっていた民具が、現在はよくわからないものとなってしまい、結果、民具の扱いを困難にさせている要因のひとつになっていることが把握できた。

また、本研究期間は、新型コロナウイルス感染症拡大の時期と重なり、各地の博物館でも休館や資料に触れる・持つことを控える動きがあった。このような状況の中でどのような活用が展開されているのかについて調査をした。結果として、YouTube 等を用いてインターネット上で動画配信に取り組む自治体や博物館が多くみられた。動画内容の傾向として、展示解説だけではなく、実際に使いながら民具を紹介する内容が多くみられた。例えば、山口県周防大島町の宮本常一記念館（周防大島文化交流センター）の YouTube チャンネル「宮本常一チャンネル」では、草刈り鎌と草刈り機で実際に草刈りを行い、使用した感想や草刈りの状況などを比べてみるといった内容の配信を行なっていた［宮本常一記念館 2020］。新型コロナウイルス感染症拡大によって通常の活動が制限される中で取り組まれた動画での民具解説は、使い方がわからない、現在の暮らしの中では見かけない民具を、動画の特徴である動作や音声等を活かして伝えようとする取り組みとみることができる。

このような自治体や博物館での民具の活用をめぐる状況からは、一般の人、特に地域住民にとって収集された民具があまり理解されていないという課題があり、それゆえにどのようなものかを知ってもらう活動に取り組む傾向がみてとれた。ここからは、民具を一般の人に身近なものとして受け止めてもらうことが、民具の継承には重要であると考えられた。

これをふまえて、民具研究の動向から、民具の活用の可能性へ結びつく着眼点を検討した。そ

の結果が本稿（２）と（３）である。

（２）民具の調査活動が持つ地域社会にとっての意義

宮本常一の民具に関する研究活動は、今日の民具研究や保存活用に大きな影響を与えている。その実態については、宮本常一個人が着目されがちではあるが、宮本の地域における民具調査は、宮本と関係する学生や研究者、そして地域住民との共同作業であり、地域における文化運動として展開してきた面が指摘されている［門田・杉本 2013］。

宮本の事例にとどまらず、大量の民具を収集、記録する民具の一連の調査活動は、行政職員や研究者だけではなく、彼らの指導や助言によって一般の地域住民が中心となって取り組んだ事例も多数ある。例えば、国指定重要有形民俗文化財「砺波の生活・生産用具」（富山県砺波市）は、6,900 点という国指定重要有形民俗文化財のなかでも有数の点数を有しているが、この調査活動は、小学校 PTA やボランティアによる活動が軸になっていた［石垣 2018］。また、国立市においても、PTA による活動や市民調査団による民具収集や調査がなされていた［くにたち郷土文化館 2022］。加えて、会津只見地域での民具調査は、地域住民が主体となったことで知られており、民具調査の参考事例として評価をされている。

このような専門家からの助言や指導を受けながら、地域住民が行ってきた民具の調査活動は、民具の調査という枠組みを超えた、住民による地域の歴史や文化の捉え直しとしてみることができる。近年、地域住民が地域の歴史や文化をどのように捉えるのかに注目がなされている［菅、北條 2019］が、民具の調査活動も、地域住民によって行われた歴史実践の一部であると捉えることもできる。このような民具の調査活動は、比較的近い過去の出来事であること、調査者が同じ地域住民であることから、調査活動の成果としての民具を、現在の地域住民にとってより身近な存在として捉えることに結びつくことが期待される。

このように、民具は、地域社会における歴史や文化理解の展開を物語る資料として活用できる可能性を有していると考えられた。

（３）現代・同時代の暮らしと物の研究動向との接点

民具については、加藤が実体概念と分析概念と分け、そのせめぎ合いの現状を指摘している［加藤 2018］ように、民具研究や博物館展示においては、現代・同時代の暮らしも対象として捉えることが可能であるものの、特に高度経済成長期よりも後の時期の暮らしを対象とすることは、あまりなされない傾向にある。この点も、現在の生活との距離を生じさせ、民具を身近なものとして捉えることを難しくしている要因のひとつになっていると考えられる。

現代・同時代の暮らしと物の捉え方については、民具研究以外の分野での展開がみられ、特に、芸術評論や表現分野での研究や実践が注目される。例えば、『限界芸術論』（勁草書房、1967）に代表される鶴見俊輔の「限界芸術論」の影響を受けている石子順造は、小絵馬や大漁旗、祝儀袋や造花などについて、「生活」「民衆」「身辺」といったことばを用いて批評している［石子 1978］。

また、『路上観察学入門』（筑摩書房、1986）に代表される、赤瀬川原平や林丈二らの路上観察学会による路上観察としてまとめられた一連の活動は、一般にも広がり、ブームが去った今日でも知られている。加えて、都築響一の『TOKYO STYLE』（京都書院、1993）のように、都市での暮らしぶりを写真で捉える動きもあった。

これらは、従来の民具研究が扱ってきた対象と重なる、あるいは延長線上にあるといえる物を扱っているものもある。また、同時代的な暮らしと物の記録の仕方や、暮らしの中の物についての関心のあり方など、方法や目的の点においても、民具研究の蓄積と結びつく部分もある。一方で、あくまでも芸術評論や表現であり、対象の採集や活動・表現すること自体が目的となっている面もあり、民具研究と比較をすると、地域像や歴史・変遷を明らかにするといった民具研究の姿勢との違いもみられる。

上記内容は、理論的な考察にとどまっているが、実際に収蔵されている民具について、現代・同時代の暮らしと物の研究動向をふまえて再度捉え直すことで、芸術的視点による評価や、過去と現在の暮らしと物のあり方を比較するといったような、新たな調査や展示へ結びつくことが期待される。

このように、現代・同時代の暮らしと物の研究動向との接点を検討することで、民具は、現代・同時代の暮らしについて考える際の資料として活用できる可能性を有していると考えられた。

＜引用文献＞

石子順造（1978）『ガラクタ百科 身辺のことばとそのイメージ』、平凡社
石垣悟（2018）「「砺波の生活・生産用具」と富山の民俗」『砺波静村地域研究所研究紀要』第 35 号、pp.20-32
門田岳久、杉本浄（2013）「運動と開発―1970 年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践―」『現代民俗学研究』５、pp.33-49
くにたち郷土文化館（2022）「歩いて 集めて 見て 聞いて－消えゆく文化を記録せよ－」、くにたち郷土文化館
菅豊、北條勝貴（編）（2019）『パブリック・ヒストリー入門』、勉誠出版
宮本常一記念館（2020/11/10）「【民具使ってみた】草刈り鎌 VS 草刈り機【前編】」https://www.youtube.com/watch?v=4rfDU-iNhzc、YouTube、参照日 2023 年 6 月 15 日

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山川　志典	４．巻 4
２．論文標題 地域の伝承に関連する文化遺産保護の新展開―研究動向と富士山麓での展望―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 環境考古学と富士山	６．最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山川志典
２．発表標題 「語り継がれてきた場所―「話がある」ということに着目して―」
３．学会等名 日本遺跡学会オンライン研究会「遺跡のなかの民俗学」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山川志典
２．発表標題 民俗学で読み解く"いま"の私たちの暮らし－「世間話」と「民具」からのアプローチ－
３．学会等名 国際基督教大学アジア文化研究所第194回アジアンフォーラム（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関